



詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探る連載「詩味礼讃 好詩家たちの対話」。第十二回のゲストは、詩人の谷川俊太郎さんです。

「二十億光年の孤独」で

マーサ 今年の一月に早稲田大学で「今更、谷川俊太郎谷川作品をめぐるシンポジウム」が開かれた際、私もパネリストの一人として出席させていただいたんですが、谷川さんとお話したのは、そのシンポジウムが終わった後の電話が初めてでした。伊藤比呂美さんか尾崎真理子さんか、とにかくお二人のどちらかが谷川さんにかけて電話に恐る恐る出たら、「マーサ・ナカムラさん、ありがとうございます」と言ってくれました。谷川さんにさん付けで呼ばれたこととお礼を言われてしまったことの驚きが二重に押し寄せてきて、それから自分が何と言ったのか、まったく記憶がありません（笑）。今日はお会いできて、本当に

うれしいです。ありがとうございます。

谷川 こちらこそ。

マーサ 谷川さんの作品との最初の出会いは、保育園に通っていた頃に読んだ『みみをすます』という絵本でしたが、強烈な印象として残っているのは、中学校三年生のときの合唱コンクールで「信じる」（課題曲）と「二十億光年の孤独」（選択曲）を歌って、私たちのクラスが優勝したことでした（ともに作詞は谷川さん）。選択曲はクラスごとに選ぶことになっていて、周囲では「pop」などが選ばれることが多かったんですが、クラスで学級会でCDコンポを前に置き、いろんな曲をみんな聞いていたときに「二十億光年の孤独」が流れたら、満場一致でこの曲を歌いたいということになったんですね。

あのととき、なぜあの曲を選んだんだろうと振り返ってみると、中学三年生くらいの時期は、もう大人のつもりではあるけれど、まだ子どもかもしれないという引け目があって、そういう不安定な中で、「二十億光年の孤独」という歌の詞が持つ空間の広さのようなものに飛び込んでみたいと思ったんだと思います。そういう貴重な経験を中学のときに……前置きはかなり長

くなってしまっ、すみません。

谷川 いえいえ、どんどんやってください（笑）。

マーサ 私は大学に入ってから詩を書くようになって、二〇一六年に現代詩手帖賞をもらって詩人として活動するようになったんですが、受賞後の第一作が掲載された『現代詩手帖』には、谷川さんと最果タヒさんの対談が掲載されていました。ただ、自分の書き方を確立する前に、強い影響力を持つ詩人の言葉に触れたら、自分が飲み込まれてしまうという思いがあって、結局読まずじまいでした。

ですがその後、『現代詩手帖』に谷川さんの「父の死」という作品が掲載されたことがあって、「いまの自分にはきつと、おもしろくないだろうな」という、尖った思いを抱きながらも、読もうという気になったんです。そして、すごくおもしろくて。詩人の中でも谷川さんは別格で、詩人たちの集まりがあったとしたら、谷川さんはバルコニー席から下々の様子を時々眺めて「やってる、やってる」と思っている人、みたいなイメージが勝手にあったんですけど（笑）、その詩を読んで、バリバリ一線の詩人なんだと実感しましたし、ある意味ライバルなんだと強く思った覚えがあ

たにかわ・しゅんたろう●1931年東京生まれ。誌作のほか、絵本やエッセイ、翻訳や脚本など、幅広い分野で活躍。近著に『いまここ』（写真・川内倫子、torch press刊）がある。

まーさ・なかむら●1990年埼玉県生まれ。詩人。第54回現代詩手帖賞受賞。『狸の匣』（思潮社）で第23回中原中也賞、『雨をよぶ灯台』（思潮社）で第28回萩原朔太郎賞受賞。